なお、ささいなことではあるが、解説二四〇ページに不明瞭な点がみられるので指摘しておきたい。本書の現存の学寮トリニティ・コレジの前身 Society of King's Scholars（一三一七年）、その後をうけた King's Hall（一三三七年）は、前者はエドワード二世、後者はその息子エドワード三世の建設になり、ヘンリー三世と王妃エレアノールとの関係からいえば、前者であれば孫、後者であれば曾孫ということになる。本文中の曾孫エドワード二世という記述はその意味で、不正確といえよう。

（B5版　二五三頁　一九七七年十月
大手前女子学園アングロノルマン研究所
一〇、〇〇〇円）
（鈴木利章　神戸市外国語大学助教授）

Jaroslav Folda

Crusader Manuscript Illumination at Saint-Jean d'Acre, 1275–1291

十字軍国家で制作された写本の彩飾についての研究は、一九五七年の H. Buchthal, *Miniature Painting in the Latin Kingdom of Jerusalem* を嚆矢とするが、その後 K. Weitzmann による一連のイコンに関する論文は別として、この主題についての研究はあまり進展しなかったようであり、本格的な研究書としては本書が Buchthal に次ぐものであろう。

表題にも見られる如く、本書はその考察対象をエルサレム王国末期のアッコンに限定しており、西欧への影響も主としてそれとの関係で論じられている。第一章 Saint-Jean d'Acre as a Cultural Center of the Latin Kingdom in the Thirteenth Century は本書の序をなす部分であり、考察の前提として一三世紀アッコンの繁栄とその知的活動の概観を行ない、更に Buchthal 以来の所謂「アッコン派」を再確認する。次いで第二章 The Acre School ca. 1275–1280: The Leningrad-Lyon Master では、Leningrad, M. E. Saltykov-Shchedrin State Public Library, MS. fr. fol. v. IV. 5 と Lyon, Bibliothèque de la Ville, MS. 828 の分析を中心に、Buchthal が不毛とした一二七〇年代のアッコン派に彩飾写本の追加を行なう。

しかし著者が力点を置くのはアッコン陥落直前の一一年間であり、それは第三章 The Acre School ca. 1280–1285: The Advent of the Hospitaller Master と第四章 The Last Years of the Acre School: The Later Works of the Hospitaller Master and his Assistants で扱われる。この時期にアッコンでの彩飾写本制作は最盛期を迎えたとするのが本書の主要な論旨の一つであり、それは著者が "Hospitaller Master" と名付ける画家の出現によりもたらされる。一二七六～八〇年頃パリからアッコンへ到来したというこの画家は本書の中心主題をなしており、彼とその弟子に帰せられる基本的にはフレンチ・ゴシックのスタイルを持つ一連の作品がアッコンの工房で制作されたとすることにより、従来のアッコン派像は修正され、更に多くの写本がそれに追加される。

こうしたアッコン派が西欧に及ぼした影響については次の第五章 The Acre School and the West で論じられ、そこでは Hospitaller Master の作風を媒介したものとして "Brussels Master" なる画家とその工房が重視される。アッコン派の影響はこの Brussels Master の工房が活動し

たとみられるパリ周辺において顕著であり、特にそれはアッコン陥落後の約一〇年間を中心とする短期間のものであったという。十字軍が西欧に与えた文化史的影響については、従来必ずしもあまり高く評価されて来たとは言えないが、他の分野についてもこうした実証研究が積み重ねられることにより、新たな展望が開ける可能性もあることを窺わせる。写本の彩飾という限られた事象に関してではあるにせよ、短命ながら明確な影響が見られることを力説する著者の所論は興味深い。

末尾には、本文中に述べられた写本のカタログが付されており、個々の写本の現在の所蔵地と名称、制作年代と場所、写本学的統計、罫線の図解、装飾についての略述、参考文献、由来、装飾の簡単な分析等が列挙されている。

全九六頁三〇三葉に及ぶ豊富な写真は非常に貴重であり、可能な限り原寸大で採録されていることと相俟って、本書の今一つの眼目であると言えよう。ただ、Buchthal上掲書を始め既に他の本に掲載されているものについては省略されており、本書を単独で読む場合には少しわかりにくい所もあることは事実である。又、色刷りが僅か一頁のみであることも甚だ残念である。実際、文中には色彩についての言及（絵の具の色ばかりではなく用紙の色等についても）が多く、もう少し色刷り頁を増やしてほしいと思うのも強ち望蜀とは言えないであろう。

（二三一頁　写真九六頁　一九七六年　Princeton University Press）

（八塚春児　京都大学研修員）

Bernardo Sepúlveda Amor et al., *Las empresas transnacionales en México*

超国家企業＝多国籍企業の問題は、今日の低開発諸国がおしなべて直面している最大の課題の一つである（ラテンアメリカ諸国のばあい、より具体的には米国系企業）。メキシコもその例外ではなく、原則として一五%以上の外資参加をみた現地企業を超国家企業の子会社とみなすならば、一九七二年には製造工業の生産総額の三四・九%がそのような企業群によるものであった（Fernando Fajnzylber & Trinidad Martinez Tarragó, *Las empresas transnacionales*, 1976, p. 153）。

本書『メキシコにおける超国家企業』は、この今日的課題に意欲的に取りくむメキシコ大学院大学国際学センター所属の研究者三名の論文から構成されている。すなわち、セプルベダ著「メキシコの工業政策と超国家企業」、ペイセール Olga Pellicer de Brody 著「外国資本の誘致（一九五三―五八年）」とメイェール Lorenzo Meyer 著「外国民間資本への抵抗――石油のばあい（一九三八―五〇年）――」の三篇である。第一のセプルベダ論文は現状分析的・政策提言的であるので、ここでは歴史分析的な他の二篇を紹介したい。

一九三八年三月のメキシコ石油産業国有化が世界石油産業史にのこる画期的な出来事だったことは周知の事実であろう。しかし被収用資産に関する補償協定の締結（一九四二年）後も、石油産業経営への復帰をはかる米国系国際石油資本と、収用以後のメキシコ石油公社の運営に苦しむメキシコ政府とのあいだで静かな闘争がくりひろげられていたことは、さほど知られていない。この一九四〇年代の紛争を「第二の石油戦争」と呼ぶメイェール論文は、いわば「第